



原町小だより「はらまち」

川口市立原町小学校
全校児童数401名

「なかよく」「かしこく」「たくましく」

HPアドレス <http://www.sch.kawaguchi.saitama.jp/haramachi-e/>

自己の能力を高めるために

校長 加田 明

夏休みが終わり、9月1日より2学期がスタートしました。新型コロナウイルス感染症は未だ予断を許さない状況が続いています。新学期も不安とストレスを抱えている子供たちがいることが予想されます。原町小学校が目指している学校は、子供たち全員にとって「今日が楽しく、明日が待たれる学校」です。一日の学校生活が終わったとき、全ての原町小学校の子供が「今日は楽しかったな、早く明日になって学校へ行きたいな」と思える学校生活が送れるよう皆で力を合わせていきたいと思えます。

さて、先日NHKで放送された『チョコちゃんに叱られる!!』において「なんで子供は縁石の上を歩きたがるの?」という問題が出ました。

そういえば自分も子供の頃、縁石があれば必ずと言っていいほど、その上を歩いたり、どぶ川があれば飛んで渡れるかどうか試してみたり、危ないからと叱られながらもそのようなことばかりしていたような記憶があります。

この問題のチョコちゃんの回答は、「限界に挑戦して己の能力を高めるため」ということでした。縁石やブロックの上を歩く子供には、「アフォーダンス」と「フロー体験」という2つの現象が起こっているということです。

1つ目の「アフォーダンス」はふだん行っている動作の手がかりを与えてくれる環境や特徴のことで、例えば、ドアにノブがあればひねって開ける、スイッチがあれば押すといった行為のように過去の経験からどうすればいいかの対応を導くことを指します。

子供はそういった経験が少ないので、新たなアフォーダンスを発見し吸収していきます。

普通の平らな道には、「歩く」といったアフォーダンスがあるのですが、そこに少し高いブロックなどがあると、子供はバランスをとって歩くという新たなアフォーダンスを発見します。そして、平らな道を歩くより少し難しそうなブロックの上を歩くという「自分の限界を超えた行動」を選ぶそうです。

2つ目の「フロー体験」とは、スポーツでよく耳にする「ゾーン」と呼ばれるもので、限界に挑戦することで集中力が高まって、時間が止まったように感じたり、通常では出せないような能力が発揮できることを言います。

簡単すぎる挑戦は「退屈」で、難しすぎる挑戦は「不安」になる。「できる」「できない」のバランスが重要のようです。限界ギリギリの挑戦をすることを「フロー体験」と呼び、そこに楽しさや充実感を得ます。そうした経験を得てくると平らな道が退屈に感じてきて、子供たちはさらに様々な挑戦をするわけです。

いつもより少し難しい挑戦をすることで快感を得る。そうしたことの繰り返しで子供は成長していくという解説でした。

このことを本校が取り組んでいる「学び合い」の学習に置き換えて考えてみたいと思えます。

学ぶ課題が簡単すぎると子供は退屈でやる気をなくしてしまいます。逆に難しすぎる課題に対してはあきらめの気持ちが先行し「学び」が成立しません。ぎりぎりなんとか挑戦すれば解けるかも知れない子供たちの興味関心を高めるような課題を設定することができれば、チョコちゃんの回答のような「限界に挑戦して己の能力を高めるため」の「学び」が実現できるのではないかと?

本校では、このような課題を授業に取り入れています。しかしそういった課題を設定することは容易ではありません。クラスの子供達の実態を把握し、授業においては子供達一人一人が「学び」に没頭しているかどうかを見極める目が必要だからです。

一人ではなかなか解けない課題、でも仲間との協同によって解決に到達できる「ジャンプの問題」を設定し、ペアや4人組のグループになり、疑問を持った子供が「ねえ、これはどういうこと?」「ここはどうするの?」と仲間に関わらせる「学び合い」の指導の徹底を図っています。

一人残らず子供の学ぶ権利を保障し、協同的な学びを追求し多様な疑問や意見の交流による学びを発展させ、学ぶことが楽しい(授業が楽しい)と思う児童の育成を目指しています。

そのためには教員の指導力向上も必要であり、本校では講師を招聘し研修会を行ったり、教員同士、互いに授業を見合ったりしながら日々努力を続けています。

2学期は感染症予防と熱中症予防対策をしながらも教室にいる子供達一人一人の集中力を高め、夢中になって時間を忘れるような「学び」の時間を成立させ、子供の能力を高め、様々な困難にも立ち向かっていける力を身に付けさせたいと思えます。

